

今日のみ言葉 233 「苦しみに遭ったのは」 2013.10.09

苦しみにあったことは、私にとって良きことであった。
私はそれによってみ言葉を学ぶことができたゆえに。(詩編119の71)

It was good for me to be afflicted , for it taught me your decrees.

私たちの人生において、何が本当に良いことであったのか、ずっとあとから分かってくることが多い。時間はその点でも、一時的に良いものや良いと思われたがじつはよくないものなどをふるい落とししていく。

書物でも同様で、一時的にベストセラーとなっても、時間というふるいにかけていくと、ほとんどが消えていく。

聖書は、いかなる時代にあっても、どのような迫害や世界戦争が生じて、ふるい落とされてしまうことはなかった。

それと同様に、私たちが振り返って、本当に良かったと実感できること、それは時間が経つことで、いっそうはっきりとする。一時的によいものは、時間が経つと次第に記憶から消えていく。あるいは、そのことを思いだすと、現在が苦しい状況にあれば、過去と比べていっそう気落ちすることさえある。

しかし、苦しみを通して神にいっそうすがり、信頼して神からの励まし、力を受けて乗り越えた経験は、後になってもずっとよきものとして残り続け、その人の生涯によき影響を及ぼしていく。

主イエスは、「ああ、幸いだ、心の貧しい人たち！」と言われた。苦しい経験によって自分というものが打ち砕かれて神を求めるようになった心には、神の国が与えられるからである。

また、悲しむ人も幸いだ、と言われた。その人がその悲しみのなかから神を仰ぐことによって新たな力を与えられるからである。

このように、苦しんだことが良かった！と心から言えるのは、その苦しみが、信仰により、神の力によって乗り越えられたからである。

万事をいやす神の力なくば、苦しみや悲しみはそれが大きいほど、その人の魂に深い傷跡を残し、生涯その人を苦しめることになる。

他者にも伝わっていくほどの良きこと—それは苦しみや深い悲しみを通して生まれる。その苦難のときに、神からの賜物をいただくからである。

…(パウロは)弟子たちを力づけ、「わたしたちが神の国に入るには、多くの苦しみを経なくてはならない」と言って、信仰に踏みとどまるように励ました。(使徒言行録14の22)

主を信じて歩むときに受ける苦しきは、神の深いご意志(み言葉)を学ぶことにつながり、苦しみの時には耐えがたいようなことであっても、神の国への確かな一歩なのである。



これは、九州から島根の集会へと移動の途中で、見いだしたものです。リンドウは、私にとって特別な思い出があります。

それは、大学2年の頃に、京都市北部の鞍馬山から歩きはじめ、ときには、地図上でも廃道とされている道なき道を5万分の1地図と磁石を頼りに、山なみを越えて、1週間近くかけて日本海側の小浜へと行ったことがあります。その時、由良川源流地帯で、このリンドウの深い青紫色に出会ったのでした。長い単独の

山行のゆえに緊張と疲れのたまった心身であったゆえに、そして一日歩いても誰一人と会わないような山奥であったので、私の心に生きた映像をそのまま焼き付けてくれるものとなりました。

青い色は、広大な大空や大海原など最も広く目にはいるものの色で、創造主はこの色に接することによって、いつもご自身の深い本性を見つめるようになされたのではないかと思います。

天を映す青、それゆえにそのたたくまいとともにリンドウは多くの人の心に残ってきたと言えます。私が最初にリンドウという花の名を知ったのは小学校のときによくラジオから流れていた島倉千代子の「りんどう峠」（1950年）という歌で、「りんりん りんどうはこむらさき…」という歌詞のはじめは今も耳に残っています。

宮沢賢治もリンドウの花が心に深く残っていたのは次の文からもうかがえます。

「あゝ、りんどうの花が咲いてゐる。もうすっかり秋だねえ。」

カムパネルラが、窓の外を指さして云ひました。

線路のへりになったみじかい芝草の中に、月長石でも刻まれたやうな、すばらしい紫のりんどうの花が咲いてゐました。…次のりんどうの花が、いっぱい光って過ぎて行きました。

と思ったら、もう次から次から、たくさんのきいろな底をもったりんどうの花のコップが、湧くやうに、雨のやうに、眼の前を通り、三角標の列は、けむるやうに燃えるやうに、いよいよ光って立ったのです。…（「銀河鉄道の夜」より）

水野源三の詩にも、次のように記されています。

来る年も来る年も 澄み渡る空には
りんどうの花が咲くように
神様の真実は変わらない
神様の真実は変わらない

